



「三丁目の夕日」に 「チョウチョ」は羽ばたく

——意識改革と地方分権を目指して

新潟県立巻高等学校3年

かわい れいこ
河合 麗子さん

20世紀の日本は、欧米を目標とし、主に物質面での豊かさを追求して来た。それが国民の目標や価値観として共有され、高度経済成長と高い生活水準を築く原動力となった。しかし、すでにこの目標が達成された今日、少子化、高齢化が急速に進み、凶悪な犯罪の増加、地方経済の停滞と共に、グローバル化や情報通信革命の進展、さらには地球温暖化問題といった様々な課題に直面している。これらの急激な変化に対応しながら、この閉塞状況を打破し、日本の活性化を図るために、2015年に向けて日本、そして私達日本人はどうあるべきかということ価値観と社会システムの変革という二つの視点から考えてみたい。

まず、物質面での豊かさの追求という画一的な生き方や横並び志向を改め、個人や、個人それぞれが持つ多様な価値観を重視し、お互いの違いを認め合う社会、人と人との繋がりを大切にする社会を作り上げていくことである。そしてそんな社会に住むプラス思考の未来と希望を持った若者を育てていくことである。

今日、無差別殺人や凶悪な犯罪など日本中を震撼させる事件が相次ぐのは、画一的な生き方を追求する結果からではないだろうか。日本はどこから見ても先進国だが、その中で、あっぱあっぱもがいている者もまた多い。志を持って失敗すれば自己責任と非難され、夢や希望を抱いても余計に辛くなるから無気力になる。経済的に困窮する中で、文句を言わず、怒りを我慢しても将来報われる見込みはなく、果てしなく損をするだけである。そんな絶望した社会で、携

帯サイトやネット文化だけが発達し、内省を持たずに自己正当化だけが助長されていく。将来を考えない生き方は過酷な現状を乗り切る一種の「適応」かもしれない。そうであれば、まず多様な価値観が認められる社会を作る必要がある。物質的な豊かさや便利さが引き起こす欲望や挫折や憎しみを超えるものは人の心の在り方しかない。一人一人の意識改革こそが人を守り、社会を安定させていくことに繋がっていくのだ。

私が好きな映画『ALWAYS 三丁目の夕日』の舞台は昭和33年の東京の下町である。みんなが貧しいが、人々は家族の情愛や周りとの温かい繋がりの中で、豊かさを手に入れる夢を抱いて生きていた。貧しさがいいというのではないが、努力すれば報われるという希望に満ちた時代だったと思う。いつの時代でも勝つ人と負ける人が出るのは当然であるが、失敗しても再挑戦への意欲を失わせないような社会のシステムの中にいるという安心感があれば、人々は苦しまないだろう。映画に出てくる東京タワーが戦後復興と物質的豊かさの象徴だとすれば、幻の指輪は金で買えない価値の象徴である。今では東京タワーは誰もが行けるし、指輪も買える。日本人はそれらのあこがれを失ったがために、その次を求めて彷徨っているのではないか、私にはそんな気がする。

そして次に、人々の意識にある、「地方」より「中央」という概念を取り払い、日本の繁栄と向上に結

「三丁目の夕日」に「チョウチョ」は羽ばたく
——意識改革と地方分権を目指して

び付けていく社会システムを築き上げていかなければならない。それについて私は以前、英語の授業で聞いた「北京のチョウチョ」という興味深い話を思い出した。これは北京でチョウチョが羽ばたくと、遠く離れたニューヨークでハリケーンを起こすという、つまり中国経済の世界経済に及ぼす影響力を表現したレトリックであるが、この理論でいくと、たとえば地方自治体の小さな改革でも、それはいつかは日本の閉塞状況をも打破する力になると期待させるものである。その例が私の住む新潟県にある。昨年の中越沖地震は4年前の中越地震と共に新潟県に莫大な損害を与えた。そんな中で、県内にある一つの企業が被害を被ったことによって、日本の自動車企業12社全体の生産が止まってしまったのである。地方の一つの企業の事故で、世界に誇る日本の自動車産業が全面ストップしてしまうというのは驚くべき現象であり、地方の力を評価する一要因にもなる。

「地方分権」は歴史的に見ても日本に適応すると思う。ペリー来航まで日本は「分権国家」であった。三百余の藩が切磋琢磨して繁栄と地域文化を競って作り上げていた。地域の実質的自立を進め、ゆとりある国作りを進めるためにも、経済や文化は主として地域に任せ、防衛、外交、情報などは中央が行う「地方分権」を目指すのである。その地方に経済や専門性の高い工業技術や固有の文化を発展させることで、地方の活性化を図るならば、人口流失を自然と防ぐことができるであろう。また、定住人口だけにこだわらずに、多くの人を訪れる交流人口を増加させていくことも地域の活性化に繋がっていく。経済的活動であれ、文化的活動であれ、とにかく多くの人を訪れるように

なれば、それがまた人を引き付けるという好循環を生み出していこう。

中央へと人が流れていくのは、そこに豊かさや便利さを求めるからであることはもちろんだが、そこに活気や魅力があることも大きな要因である。それどころか日本は今、国際化の時代を迎え、もっとも効率的で質の高いサービスを求めて日本から海外に流れる傾向にある。本社そのものを海外に移転させる企業や、生活根拠地を海外に移す人々も増えている。その流れを地方に応用するのである。例えば、店員さんが愛想良く、気持ち良く買い物ができる店なら、少しぐらい値段が高くてでもまた買い物したくなる。人々の礼儀正しさと思いやりの行為に触れることができる観光地なら、少しぐらい遠くてもまた旅したくなる。人を引き付ける魅力とそれを作り出す努力は今の日本人に、そして地方の活性化にとってなくてはならないものである。国の問題は同時に一人一人の市民の問題でもある。市民が自らの立場で夢やビジョンを持ち、アイデアを出して、積極的に働きかけ、変えていく努力をする。自らが「働く」という姿勢がなければ問題を解決していくことはできないのである。そして進展や停滞に一喜一憂するのではなく、少し長い目で見ていくことも大切なのである。日本の社会システムを地方から変えていきたいという思いを持つこと、地方の力を引き出す工夫をすることは私達に与えられた課題である。

しかし、2015年、世界がどんなに変わっていかうとも、私達は日本人としての「誇り」と「自信」を失ってはいけない。オリンピックで君が代を聞きながら、日

「三丁目の夕日」に「チョウチヨ」は羽ばたく
——意識改革と地方分権を目指して

の丸を見上げる時だけ日本人としての「アイデンティティ」を自覚するのではなく、それを常に持てること、持てる努力をすること、これこそが日本人が自分達の未来を切り開いていく原動力となり得るのだ。私自身はいつも家族を、故郷を愛し、感謝し、誇りに思っている。そしてそれは大きな「愛国」に繋がる小さな架け橋だと思っている。二度にわたる震災に見舞われた新潟県だが、震災の翌年から毎年夏になると「フェニックス (不死鳥)」という大花火が県民を励まし、勇気と希望をくれる。県民は不死鳥として再生に立ち上がったのである。日本人も今の危機的状況から脱却し、新生する可能性を大いに秘めている。何を「フェニックス」とするかは鍵は私達が握っている。この国の未来に期待しよう。